

●さくら薬局 長岡古正寺店

住所：新潟県長岡市古正寺1-2839
 開局時間：月・火・木・金（8:30～18:00）、
 水（8:30～16:30）、土（8:30～13:00）
 定休日：日・祝日



名城大学大学院薬学研究科修了後、医薬品メーカー研究開発室勤務などを経て2003年、同薬局に着任した大黒幸恵さん



チーム長岡古正寺店のメンバー（薬剤師5人＋医療事務3人）。大黒さんはこのチームの中心として、AMR対策などに取り組んでいる



地域で、大黒さんが講師となって開いている「くすりのセミナー」



薬の処方実績から、かぜや溶連菌感染症など同薬局周辺で流行中の感染症情報（写真左上）も掲示

薬剤師ができることは
たくさんある

「薬剤師はカルテを見ることができません。医師の診断内容は患者さんから聞くしかないのです。だから、疑問を感じる処方についてはそのままにせず、親御さんにしつかり尋ねるようにしています。なぜ、この抗菌薬が処方されたのか？ その妥当性がわからない時には診療所に疑義照会して確認も取りました」と大黒さん。

また、抗微生物薬適正使用の手引き（厚生労働省）も取り組みの後押し

に。たとえば溶連菌感染症は、以前はセフェム系抗菌薬がよく処方されましたが、AMRを誘導するリスクが高いことから、今ではペニシリン系のアモキシシリン水和物内服10日間が推奨され第一選択薬となり、医師の処方も変化しました。

「私たちが窓口でできることって、実はたくさんあるんです。ペニシリン系抗菌薬のアモキシシリンは10日間服用のお薬で、しかも1回の服薬量（嵩）が多い。セフェム系（4～6日）から変わった当初は親御さんから『1回でこんなに飲むの？ 10日も飲むの？』という声がありました。それに

県民へのAMR対策の
普及啓発に努める

小児科だけでなく、今後は耳鼻咽喉科や皮膚科領域での取り組みが求められています。

対し、適正量を処方期間通りに全て飲み切らないとかえって菌を強めてしまうこともあるなど、ご納得いただけるまで説明することで、親御さんにも適正使用の意識が芽生えてきました。そうやって患者さん自身がAMRに対して正しい知識を持ち、疑問に感じたら質問できるような将来像はないでしょうか」

「自己判断で服薬をやめそうな患者さんにはきちんと声をかけてフォローするとか、店内に対策用の資料を掲示して患者さんの意識を高めるとか。できることから始めてほしいと思います」

新潟県には薬の適正使用を一般に普及啓発する薬事衛生指導員の制度があり、大黒さんも指導員として年4～5回、地域のセミナーに講師として参加するなどの活動をしています。

また、県の学校薬剤師会副会長および薬剤師会常務理事としても、機会があるごとにAMRの話をしてその対策の普及啓発に努めています。

「グッドプラクティス」スタディ

薬剤耐性（AMR）対策に
積極的に取り組む人たち

薬剤耐性（AMR）対策は、医療機関だけが講じているわけではありません。
 ここでは、薬局や高校での取り組みを紹介します。

抗菌薬をよく使う小児科
乱用抑制に取り組む

地域の方々の人生に寄り添い、健康寿命を延ばすサポートができる薬局を目指し、36都道府県に842店舗（2024年3月現在）を展開するさくら薬局グループ。新潟県長岡市にあるさくら薬局長岡古正寺店は2002年の開業以来、地域連携薬局や健康サポート薬局の認定を受けるほか、無菌調剤やオンライン服薬指導など、地域の医療ニーズに丁寧に対応しています。



同薬局窓口で啓発ツールを手渡す大黒さん

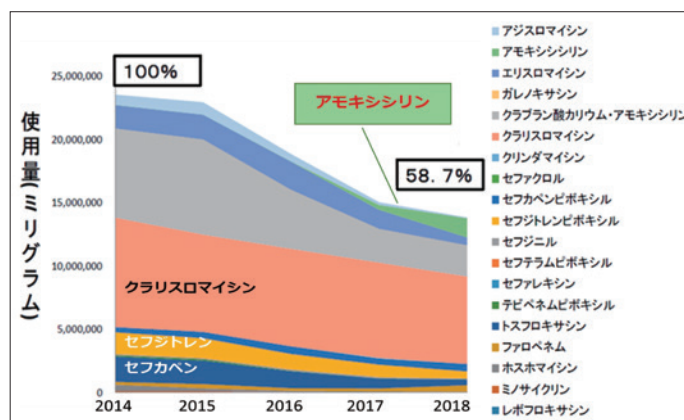
「近くに小児科の診療所があつて、



手渡しだけでなく、店内にも啓発ツールを掲示し、AMRへの関心を促す

応需する処方箋はその診療所からが多く、患者さんの96%が小児ですね」と語るのは、薬剤師の大黒幸恵さん。小児薬物療法認定薬剤師として患者やその家族とかわりつつ、小児薬物療法研究会に所属し、仲間と薬剤の適正使用を広める活動を続けています。なかでも、薬剤耐性（AMR）は医療全般にかかわる問題で、小児科では特に注目されています。

「理由は小児科、耳鼻咽喉科、皮膚科で抗菌薬をよく使うから。私も乳児期から抗菌薬を処方される患者さんを見て、腸内細菌叢の乱れなどを心配していました。抗菌薬の乱用を



コロナ禍前、同薬局で抗菌薬の処方を減らす活動をした結果、抗菌薬使用量は58.7%まで減少（2018年同薬局調査）

抑えることに関心を持ち活動を続けていたところ、国が2016年4月に「AMR対策アクションプラン」^{※1}を発表したときには『これだ！』と心が躍りました。その後グラム染色^{※2}を臨床に使って抗菌薬使用を激減させた奈良県橿原市のまえだ耳鼻咽喉科クリニックの前田稔彦・雅子先生ご夫妻から声をかけていただき、一緒にシンポジウムに参加しました。全国の医師や薬剤師の方と交流できて世界が広がりましたね」

※1：薬剤耐性菌の発生をできる限り抑え、薬剤耐性微生物による感染症のまん延を防止するための施策

※2：検体中に存在する細菌を青色と赤色に染め分ける染色法